

研究所だより

第353号
2015年 9月 1日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“あれ松虫が 鳴いている ちんちろ ちんちろ ちんちろりん
あれ鈴虫も 鳴き出した りんりんりんりん りいんりん
秋の夜長を 鳴き通す ああおもしろい 虫のこえ”
童謡・唱歌 「虫のこえ」



～実りの秋スタート～

夏休みも終わり、児童生徒の元気な顔、声が学校に戻ってきたことでしょう。休み中、それぞれが長期休業でなければできない貴重な体験をしたことでしょう。また、先生方も研修や研究をされてきたことと思います。運動会・体育祭をはじめ諸行事に多忙な2学期、地域の人達と学校の関わりを深める機会の多い時期でもあります。益々多忙感は増大するでしょうが、蓄積されたエネルギーをフルに生かし、実りの多い秋であって欲しいと思います。

<夏休み明けの学級づくり>

40日余りの家庭主体の生活から学校生活へ戻ってきた子ども達にとっては、学校や学級で夏休み前にできていたことができなくなったり、築き上げたことが崩れたりしていることがあります。再確認しながら様々な取り組みを始めましょう。

【ルール・マナーの再確認】

みんなで気持ちよく集団生活を送るためのルールやマナーの意識が薄れ、夏休みに前に身につけていたものも忘れていくことが多いでしょう。そこでまず取り組みたいのは、人と関わるときや集団で生活するときのルールやマナーの再確認です。学級の実態に応じて、みんなが楽しく快適に学級で生活したり活動できるように、マナーやルールを数個決め、全員で守れるようにしましょう。

ルールやマナーを確立するために担任から強制的に守らせることは、子ども達からの反発を防ぐために避けた方がよいでしょう。ルールやマナーは、人と関わったり、集団生活で楽しく活動したりするために、人間が編み出した生活の知恵であることを十分理解させた上で、子ども達自身で決めさせ、取り組むようにしたらどうでしょうか。

また、各係活動や委員会活動等の中で、学級での存在感を植えつけ、互いに認め合う雰囲気づくりをすることで、集団を高め合うことができます。特に行事が多い2学期は学級集団を高める絶好の機会です。

行事で集団を高める。行事が集団を高める。学級担任の腕の見せ所です。

<土佐清水市教育研究集会・一日教研 8.5(水)>

一日教研ご苦労様でした。午前中の全体会では、鹿嶋真弓先生（高知大学准教授）をお招きし、「互いに認め合い高め合う学級集団づくり」と題しての講演をお聞きしました。午後は、各部会研修で先生方の自主的、主体的な一日教研になったことと思います。下記に鹿嶋先生の実践を紹介します。

☆学級経営のストレスとその予防

人が二人以上集まれば集団となる。集団になるといろいろなことが起こるのは当たり前である。いろいろなことが起こることを前提に『人の中で人が育つ』ためには、互いに認め合い高め合える関係づくりが、教師に課せられた課題となろう。ところが、教師の中には、子どもが失敗しないように問題が起こらないように指導することこそ、教師の役目と考えている人も少なくない。故に、子どもが

失敗したり、問題を起こしたりすると、自分の指導がダメだったとか、自分はきちんと指導したのに、その指導に従わなかった子どもが悪いとか、いろいろと原因を追究する人も出てくる。ここでは、学級経営のストレスの予防について、①何するか、②何をしてはいけないか、といった教師の働きかけと、③ストレスをためないための魔法の言葉について述べていく。ここでいう魔法の言葉とは、脳をとらわれから解放するためのきっかけとなる言葉のこと。とらわれから解放されるために、リフレーミングの考えを活用する。リフレーミングとは、いままでの考えとは違った角度からアプローチしたり、解釈を変えたりと、誰もが潜在的にもっている能力を使って、意図的に自分や相手の生き方を健全なものにし、ポジティブなものにしていくことである。

1. 良好な学級集団をつくる困難さ：教師のはたらきかけに対する子どもの変化に注目

(1) ボタンのかけ違いに気づくには

子どもの反応（行動）をよく見て、子どもの変化に敏感になることである。そして、こちらが伝えたいことが子どもたちに伝わっているか否かの視点をもつことである。伝えたいことが伝わっていたら、望ましい行動（あるいはそれに近い行動）へと変化するが、伝えたいことが伝わっていなかった場合、行動は変化しない（あるいは望ましくない行動をとる）。

(2) 気づいた次にすることは

ボタンのかけ違いに気づいたら、その対応を変えること。子どもの行動が望ましい行動に変わらないのは、教師の言葉を受け取れていないからである。だとするならば、彼らが教師の言葉を受け取れるまで、望ましい行動に変わるまで手をかえ品をかえ、はたらきかけるしか方法はない。つまり、行動が変わらなかつたら、即次なる一手を打つことである。そして、次なる一手を打つためには、たくさんの引き出しをもつことである。自分の引き出しを増やすには、他の先生方がどのようにやっているか聞いたり、うまくいっている教師の対応のしかたを見せてもらったりするといいい。

(3) ストレスをためない魔法の言葉：なおそうとするな、わかろうとせよ

自分の思い通りに子どもが動いてくれない、学級が育っていかないと、いらいらしたり、落ち込みそうになったりした場合の魔法の言葉は『なおそうとするな、わかろうとせよ』に限る。こちらがなおそうとするから、子どもはなおされまいと抵抗するのである。ならば、一度『なおす』という考えから離れ、その子はどのような気持ちでこのようなことをしているのか（このような態度をとる）のか、その子の気持ちを『わかろう』とするスタンスをもつことである。子どもにとって、わかろうとしてくれる人の存在、信じてくれる人の存在は、勇気と希望を与える。自分をわかろうとし、信じてくれる人がいるから、いろいろなことにチャレンジできるのである。学級経営において、一人ひとりがいろいろなことにチャレンジし、自己実現へと向かおうとするエネルギーで満たされれば、自然と学級集団も成熟していくであろう。

○何をするか：子どもたちの行動が変わらないときは、いままでとは異なるはたらきかけを試みる

○何をしてはいけないか：子どもたちの行動が変わらないときに、同じはたらきかけを繰り返すこと。

魔法の言葉：なおそうとするな、わかろうとせよ。

（「指導と評価」7月号より抜粋 日本教育評価研究会）

～スキルアップ講座（振り返り）～

夏季休業中に2本の講座を実施しました。今回はⅡ期講座について報告します。8月11日に実施したⅡ期講座では、幡陽小学校の岡田栄喜先生を講師にお招きし『PAの手法を取り入れた人間関係づくりの講義と演習』を中心に行われました。参加人数が6人と少なかったのですが、逆に和気藹々とした雰囲気の中で楽しく活動することができました。

PA (Project Adventure)とは、冒険教育をベースにして、体験学習の手法を取り入れたものである。それぞれの長所を活かし、冒険教育で学習者の心を開き、体験学習でこころを育てる。人間の心の成長と学習効果を高めるという両方に効果がある、今の学校にとっては、たいへん好都合な教育手法である。一般的に体験学習というものは、積み重ねた体験の中からある種の法則性を自分たちの力で発見していくということだ。そうすることにより脳の各所にある今までの知識や経験と今の体験との間にネットワークができて、断片的な知識ではなく、意味のある使える知識を獲得することができる。「あっ、そうか!」という気づきの瞬間に人の頭の中に見事なネットワークを構築する。こうして得た知識はなかなか忘れない。このときに大事なことは脳にストレスがかかっていないということである。あれをやってはいけない、これをやってはいけないという制約ばかりでは脳が活発に動かないのでネットワークが広がらない。「こんなことを言うと人にバカにされるかもしれない」と思ったら発想に制約ができてしまう。強迫観念のないところで、色々なことに挑戦して、何でもやってみるということが使える知識を身につけるためだいじなことである。たとえ失敗であっても、その失敗の中からも多くのことを学べる。体験学習とは従来の学習にただ体験する機会を増やせば良いとする単純なことではない。「人間の脳は体験をどのように消化しているか」「学習を効果的に行うためにはどのような環境を設定すれば良いか」ということを体験学習理論は問題としている。

学習を効果的に行うため、「知識を直接教えない」という考え方があ。知識を直接教えていると「気づき」は起きにくい。自分で考えているということをしなくなるからである。「気づき」の芽をつぶさないためには、直接知識を教えないという方法をとる。この場合、見ていて直接教えたくなくても我慢する必要がある。その時だめでも体験学習は繰り返されるので、この次にはきっと気がついてくれる。児童生徒を信頼しなければ待てない。

体験学習では体験をそのままにしておくのではなく、それを振り返る機会を積極的につくっていくことが必要である。体験のなかにはいろいろな素材が埋もれている。これを見つけやすくしてあげるのがファシリテーター（援助者）の重要な役割である。「振り返り」ではなるべくみんなが発言する機会を持てるようにする。でも発言は強要しない。「振り返り」の中で出てきた重要なことは、なるべく深く掘り下げてみる。だれも何も言わない沈黙な時が流れても、しばらくそのまま平気であることも大事である。きっと、その間も何か考えていてくれるはずである。「振り返り」は強引に進めないことが大切である。何も話がでなければ次に進めば良い。（「PA入門」より抜粋）

※詳細：「だれでもわかるプロジェクト アドベンチャー入門」をダウンロードしてください。



書籍紹介

新しい書籍を購入しました。ご利用をお待ちしています！

○「王道」ステップ ワン・ツー・スリー

曾山和彦 著

「軌跡」が「奇跡」を生む！
特別な能力・技術に長けた教師が特別な場において実践できることではなく、誰もが配慮・工夫により実践できる活動を紹介した1冊

○学校がするソーシャルスキル・トレーニング

曾山和彦 著

子どもが時々出す「オニの心」を鎮める・鎮め方を教える時期は、児童期において他にない。「人とかかわる楽しさの中で教える」を大切にするSST（ソーシャルスキル・トレーニング）満載の1冊

○気になる子に伝わる言葉の“番付表”

曾山和彦 著

心が折れそうな子に伝わる言葉とは？
気になる子のいいところ探し/マイナス感情の伝え方など場面毎に紹介！

○気になる子への支援のワザ

曾山和彦 著

若い先生方には、各章にて提示された具体例を見て「これはいいなあ」「これなら自分もできる」というものが満載の常に手元に置き「指南書」となる1冊

○気になる子への対応術

曾山和彦 著

特別な教育的支援が必要な子、その周りにいて落ち着かない子、最近様子が変わって気になる子など、担任だから気づくちょっと気になる事例をあげ、その一つひとつに対し「個別」「学級集団」「保護者」それぞれへの支援法を具体的・実践的に提案。笑顔がこぼれる学級づくりのテクニックが満載の1冊

○気になる子が溶け込む授業のしかけ

曾山和彦 著

発達障害のある子、その子にわざと刺激を与える子やかかわりを嫌がる子...そんな「気になる子」の心の声に寄り添いながら、自然と授業に溶け込ませ、クラスのどの子も笑顔にする教師テクニック満載の1冊

○中学生の自律を育てる学級づくり

鹿嶋真弓 田中輝美 著

子どもたちが自分自身の自律の力を学級という仲間集団の力を通して伸ばしているような、学級担任の支援のあり方など満載の1冊

○中学校学級経営ハンドブック

鹿嶋真弓 吉本恭子 著

「学級環境づくり」「仲間づくり」「キャリアづくり」の3つの柱に沿ってクラスの生徒が必ずのってくる失敗しにくい実践やエクササイズを厳選。人は人の中で育つ！各学年の生徒の特徴やかかわり方のポイントがつかめ学級担任をもつことが楽しくなる1冊